博士論文（要約）

# 関係性の表現
## ヴァルター・ベンヤミンとモナドロジー

茅野大樹

**はじめに**

本論文は、ベンヤミンの一九一〇年代から二〇年代半ばにかけての著作を主な考察対象とし、この時期のベンヤミンの認識論の発展と展開において、ライプニッツ哲学の受容と解釈が果たした意義を明らかにした。その際には、ベンヤミンとライプニッツとの直接的な影響関係だけでなく、ベンヤミンが触れることのできたライプニッツの解釈史も考察の対象とした。とりわけコーヘン、ナトルプ、カッシーラーを中心とした新カント主義、シュレーゲルとノヴァーリスの初期ロマン主義、そしてゲーテによるライプニッツ解釈との比較検討、そしてそれらとの対決を経たバロック悲劇研究に至る、ベンヤミン自身の認識論の変遷の軌跡を再構成することが、本研究の中心的な課題だった。

ライプニッツの受容と解釈という観点を導入する時、ベンヤミンの多くのテクストにおいて、「関係性」の概念が中心的な問題として浮かび上がることを本論文は指摘した。ベンヤミンによる関係性概念の規定は常に一定ではなく、その思索の過程ではその意義の少なからぬ変遷すら見出される。本論文では、ベンヤミンによる認識論の展開を、この関係性概念の定義の変遷に沿って記述することを試みた。以下では、全四章で構成される本論文の内容を、章ごとに要約する。

**第一章**

ベンヤミンが認識論における関係性の概念に着目するようになった一つの契機が、同時代の新カント主義マールブルク学派からの影響だった。それゆえ本論文の第一章では、初期ベンヤミンによる新カント主義の受容の問題を論じた。周知のようにライプニッツのモナドは、何らかの延長を持った物体的な原子のようなものではない。それはむしろ表象や欲求、そして〈力〉の作用の発露から構成される、純粋に精神的な原理として理解される。マールブルク学派の論者たちがライプニッツに依拠して試みたのは、そのように物質的要素を捨象した、純粋な思惟の原理を基礎にして構成される認識論の再編だった。ライプニッツの学説は、認識において思惟を直観の要素に先行させるコーヘンによる認識批判の先鋭化の一つの源泉となり、さらにカッシーラーはモナドに「実体」から「機能」の原理への移行を見出した。つまり、デカルトのように延長としての物体の要素を含む実体から区別されたライプニッツのモナドは、純粋な思惟の原理として解釈されることで、全く異なるシステムにおいて外形的に異なる形態を取ったとしても、その〈機能〉と〈構造〉の観点から同一の法則性を表現する原理のモデルとなったのである。マールブルク学派の多くの論者が共通して目指していたのは、経験における直観の多様性を、同一の〈関数〉関係を持つ思惟法則からの産出の結果と見なすことで、無限に変化する経験の諸要素を、同一の法則的な「関係性」の内に統一する認識論の構築である。この時に極端なほど数学的思惟へと引き付けられたマールブルク学派における関係性概念との対決が、初期ベンヤミンの認識論の基礎が形成されるための一つの前提となった。

「来るべき哲学のプログラム」を中心としたカント論においてベンヤミンは、カントが

あくまで固執していた直観と悟性の二元性、そして主観と客観の二つの要素から構成された認識概念を克服した点において、新カント主義によるカント認識論の再編に一定の評価を与えている。しかしベンヤミンは、カントの認識論の体系に経験と認識の間の統一性と連続性を取り戻す試みは、新カント主義のように直観を伴うあらゆる具体的経験を数学と論理学の科学的な体系へと還元することによってではなく、むしろ形而上学によって可能になると述べている。そしてこのカント解釈における両者の対立は、彼らのライプニッツ解釈の差異にも重なる。つまり新カント主義は、カント哲学の数学的、科学的体系への傾向を先取りしていた点においてライプニッツを評価するが、ベンヤミンはむしろモナドロジーを中心とした形而上学の体系にライプニッツの意義を見出すことになる。

さらに本論文は、ベンヤミンの初期の論文「ヘルダーリンの二つの詩」における詩作品の解釈の方法論に見られる、新カント主義からの影響を論じた。ベンヤミンは後期ヘルダーリンの詩の解釈において、芸術の理念が展開される詩の圏域を「詩作されるもの」と呼ぶが、そこでは詩の個々の要素や言葉が詩人の主観的な感情やイメージに基づいた意味の結び付きを失うことで、純粋に構造的な機能単位となることが主張される。このような解釈の方法は、カッシーラーによって近代科学の認識論的パラダイム変化として捉えられた、経験における直観の要素を集積する〈量〉的な方法から、認識の諸要素をアプリオリな思惟法則としての関数原理によって統一する〈質〉的な方法への移行に依拠するものである。カッシーラーが、近代における〈実体〉から〈関数〉のモデルへの移行の一つの先駆けをライプニッツに見出していたように、ベンヤミンの〈詩作されるもの〉の概念は、実体の要素を排除した純粋な関係性の表現原理として、モナドの概念を予告している。このことから本論文は、初期ベンヤミンのヘルダーリン論の内に、諸要素の純粋な関係性の理念として後の悲劇論で言及される、モナドロジー的思考の最初の萌芽を見出した。

**第二章**

第二章においては、主にベンヤミンの博士論文である『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』に焦点を当てた。シュレーゲルとノヴァーリスの解釈において、ベンヤミンがその認識論の基本構造として抽出するのは、初期ロマン主義者たちがフィヒテから継承した「自己反省」の理論である。そしてロマン主義の反省概念を特徴付ける「直接性」と「無限性」の構造は、この時期のベンヤミン自身の関係性概念をも特徴付けている。つまり反省とは思惟が〈直接的〉に思惟自身に向かう自己関係性の表現に他ならず、自己の内で満たされた思惟が思惟の形式そのものを思惟することで、思惟の内容は〈無限〉に産出される。ここにはカント論において課題とされていた、客観を知覚することで表象を形成する主観という認識論の前提を刷新する試みが、自己産出的に累乗化する媒質的認識として、初期ロマン主義の芸術作品の理論を基に展開されていることを確認することができる。

さらに本論文は、シュレーゲルにおける反省の絶対的産出の形式が、自己の内に宇宙全体を孕むライプニッツのモナドを一つのモデルとしていたことを指摘した。アテネウム期

のシュレーゲルは、ライプニッツの著作を集中的に研究しており、一つの個体が自己の内部に宇宙の全体を反射させ、反省するライプニッツのモナドに注目していた。そしてモナドの自己鏡像的な構造は、同時期のシュレーゲルが捉えていた、自己反省的な芸術作品の構造と類比的な関係にある。そこで芸術作品は原作者の主観的な恣意の産物ではなく、客観的な芸術の理念そのものが展開される場としての〈媒質〉であり、作品は思惟が自己反省するかのように、批評や翻訳によって解釈されることで、無限に生成・発展する。本論文は、ロマン主義とベンヤミンによる媒質としての芸術作品の解釈に、宇宙の「生きた鏡」として自己の内に世界の全体を孕むモナド的構造を指摘した。

アテネウム期のシュレーゲルは、一つの有機的な全体を形成していたギリシア古典文学をモデルに、近代において断片と化したあらゆる芸術ジャンルを、再び一つの芸術の理念へと統合することを、ロマン的ポエジーの課題と考えていた。反省概念に基づく芸術作品の理論においてロマン主義に接近したベンヤミンは、しかしこの理念論において後にロマン主義から離別する。後年の『ドイツ悲劇の根源』においてライプニッツのモナドは、むしろ複数に離散し、孤立した諸々の理念の構造の表現として解釈される。本論文は、ベンヤミンとロマン主義の理念論の解釈の相違が、すでにロマン主義論末尾のゲーテの章において示唆されていることを指摘した。そこでは芸術の理念が展開する媒質として、個々の芸術作品が〈一つの作品〉の全体性へと連続的に統合されるロマン主義に対して、批評による作品の生成を否定し、個々の作品を相対的に完成したものとして捉える、ゲーテの古典主義的な芸術理論が対比されるからである。本論文は、それぞれ異なった観点から芸術の理想を表現するゲーテ的な芸術作品の多数性の構造が、後の『ドイツ悲劇の根源』における、複数の離散した理念の調和的な関係構造の基礎となったことを指摘した。

## 第三章

本論文の第三章では、ロマン主義論と「ゲーテの『親和力』」を中心とした、ベンヤミンによる一連のゲーテ論に焦点を当てると共に、両者のライプニッツ解釈の差異を論じた。ゲーテにおいて自然の内に見出されるあらゆる形態は、形成の過程において無限に多様な変化を見せながら、常に同一の普遍法則をも表現している。そしてライプニッツのモナドは、このような自然の自発的な形成原理の一つのモデルを提供した。ゲーテに特徴的なのは、このような自然の内的な形成の力の原理を、あくまで具体的な経験において直観しようとした点にある。ゲーテの「原現象」の概念は、このような意味で、自然の普遍的原理が直観に対して生き生きと啓示されることとして理解される。

本研究は、ナトルプを中心としたマールブルク学派によるプラトン解釈の影響の下、ベンヤミンがゲーテの原現象をプラトン的イデアに引き付けて解釈している点に着目した。具体的な経験において直観されるゲーテの原現象を、不可視のイデアとして解釈することにより、ベンヤミンは初期の媒質的な認識概念とは明らかに異なる観点を導入している。初期ベンヤミンにおける、無限の理念の自己産出が展開される媒質の原理においては、現象か

ら理念への連続的な移行が前提されていた。それに対して一連のゲーテ解釈においては、ゲーテの汎神論的な自然の概念を批判し、プラトン的イデアに現象から独立したアプリオリな認識批判的原理の意義を見出すことで、現象とイデアの間の概念的区別が強調される。本論文はこの点に、連続的な媒質原理から、断絶した現象とイデアの照応の可能性として、両者の「潜在的な同一性」を問うに至る、ベンヤミンの関係性概念の一つの転換点を見出した。

　ベンヤミンの論文「ゲーテの『親和力』」は、そのように自然において直観されずに隠されたままのイデアの表現の問題を、芸術作品の内での真理の表出として問う、作品批評の試みであったと考えられる。ベンヤミンの解釈によれば、ゲーテの小説において顕在的な事象内実として現れるのは、いかなる決断や行為によっても解消されない神話的な運命の連関だが、その内には死すべき人間が持つ究極的な「希望」として、不死性の理念が作品の「真理内実」として隠されている。その際に本論文は、晩年のゲーテがライプニッツのモナドに魂の不死の活動原理を見ていたことに注目した。それにより、モナド的な魂の高次の活動性から極端なほど遠ざけられたオッティーリエに対して、その不死性の希望を隠した『親和力』の作品構造が、解釈によって芸術作品の潜在的な理想としてイデアの表出を問う、ベンヤミンの新たな批評概念の定義にとって範例的な意義を持っていたことを明らかにした。

　そしてそれはまた、ベンヤミンとゲーテのライプニッツ解釈の差異にも関わる。つまりベンヤミンは、モナド的な不滅の形成原理を自然の現象の内に直観するのではなく、芸術作品の内に潜在的に表現される理念としてのみ認めたのである。本論文はまた、両者のライプニッツ解釈の差異が、ゲーテの「原現象」とベンヤミンの「根源」の概念にも並行して見出されることを指摘した。つまりゲーテがライプニッツのモナドを、自然の形態を絶えず新たな形成へと導く根源的な〈力〉の発現として捉えたのに対し、ベンヤミンはむしろ形態として現れていない潜在的な領域としての〈歴史〉を表出する構造を、モナドの内に見出した。このことから本論文は、ゲーテの形態学とベンヤミンの歴史哲学を、ライプニッツ哲学のそれぞれ異なる解釈の可能性として捉え直した。

**第四章**

　本論文の第四章においては、主にライプニッツ・モナドロジーの解釈の観点から、ベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』を論じた。同書の「認識批判序論」において、イデアは現象における志向的な認識の連関によっては構成されない、それ自身で自存する所与の存在として特徴付けられる。そしてこのようなイデアと現象の関係は、互いに異質なものの「表出」あるいは「表現」の関係として理解できる。つまり外形的にいかなる因果関係も持たない二つの領域に関して、その構造的な類比性による相互の〈対応〉の可能性が考えられているということである。ライプニッツにおいて諸々のモナドは、そのように互いに一切の実在的な影響を持たないにもかかわらず、同一の宇宙を個々の視点から独自に表現することにおいて、全体が「調和的」な関係にある。ベンヤミンはこの関係性原理を、独立して触れ合うこ

とのないイデア同士の調和に適用すると共に、現象においてモザイク状に離散した諸々の要素の「配置」に、それと類比的な構造を見出している。本研究は、ベンヤミンのモナド解釈を中心に、過去から未来に渡る宇宙の歴史の全体を潜在的に内包する時間の構造を見出すと共に、ベンヤミンによるドイツ・バロック悲劇の解釈を、モナド的な時間の構造によって、イデアと現象の間の潜在的な〈表現〉、つまり〈対応〉の関係を表出する試みとして読解した。

悲劇論の本論において、ベンヤミンはバロック悲劇における内在的な世俗世界と超越的なイデア界との対立を度々強調する。しかしバロック悲劇の時間、悲しみの感情とメランコリー、そしてアレゴリー的言語という三つの主題は、いずれもその時間構造によってイデアと現象の〈対応〉の関係を示唆している。

ベンヤミンは、シュミットの指摘した法学と神学の間の構造的対応関係を基に、バロック悲劇の君主論に注目するが、そこで専制君主の意義は、決断能力の欠如によって現世での復興の理想を遅延させ続ける点に見出される。またバロック悲劇に固有の時間構造を構成する要素として、バロック悲劇に頻出する亡霊の存在が挙げられる。ギリシア悲劇において、神話的な罪の連関を解消する英雄の死は、バロック悲劇において死後も劇中に現れる亡霊の存在によって、その結末としての意味を失い、歴史の時間は被造物の滅びの過程を永続化し、未来へ向かう歴史の流れを停滞させる。本論文は、このように決断不能な君主や亡霊の存在によって構成されるバロック悲劇の時間構造が、いずれもベンヤミンの根源概念の定義で言われる、復興の理想とその未完結性の二重性に対応していることを指摘した。そして、未来へ向かう歴史の一方向的な流れを遅延させることで、歴史の全体を現在の時間の内に凝縮させる根源の時間の形式は、現象の全体を表現するモナド的なイデアと構造的な対応関係にあると考えられる。

本論文はまた、ベンヤミンの悲劇論における悲しみの感情とメランコリーの概念においても、被造物とイデアの間の〈表現〉と〈対応〉の関係が示されていることを指摘した。ベンヤミンは悲しみの概念を、曖昧な認識でありながら真理の構造に呼応する、被造物の客観的な感情として定義する。このような悲しみの認識構造は、低次の感情から叡知的なイデアの直観へと階層的に上昇する、新プラトン主義の伝統を汲んだルネッサンスのメランコリー概念を源泉としているが、それはまた非判明な表象の内に世界全体の無限の表象を潜在させるモナドの構造とも親近性を持っている。そしてメランコリーに沈む被造物の悲しみにおいては、その曖昧な知覚の内でおぼろげに未来の災厄が予知される。本論文は、そのように未来の予知を孕む悲しみの感情に、時間の全体を非判明な仕方で表現する、モナド的な時間表象との類比を指摘した。

悲劇論の後半においては、細断されて有機的な意味を失った無機的記号としてのアレゴリーの形式が、バロック悲劇に固有な言語表現として論じられる。本論文は、理念の全体性が瞬間的に直観される象徴とは異なり、被造物の滅びの歴史を解釈によって解読されるべき暗号として隠したアレゴリー的言語に、潜在的な仕方で歴史を表現するバロックの時間

構造を指摘した。そして、楽園のアダム言語のような象徴的性格を失ったアレゴリーの形式に対しては、翻訳や批評のような解釈の過程が必然的に要請される。本研究は、悲劇論におけるベンヤミンの哲学的批評の方法が、バロックの朽ちた廃墟に歴史の全体を読み取るアレゴリー的批評として、現象とイデアの〈表現〉と〈対応〉の関係を表現するための基礎になっていることを指摘した。

最後に結語と展望においては、本論文で言及できなかった後期ベンヤミンの著作において、モナドロジー的思考の異なる展開を読み込む可能性を提起した。ベンヤミンの思索の展開全体におけるライプニッツの意義を問うなら、そこには単なる理論的な受容や影響関係には還元できない、両者の思考の内的な照応と呼ぶべき関係が見出される。そしてベンヤミンのモナドロジー的思考とは、モナド的な表現の関係をめぐって異なる仕方で現れる、複数形の思考の形式だったのではないだろうか。

※本論文の全体は、二〇一九年九月より五年以内に出版される予定である。